

world's

W・ランドルフ・クレツリ
W. Randolph Kiezel 著

瀧川郁久
Ikuhisa Takigawa 訳

仏教の コスモロジー



W・ランドルフ・クレツリ (著)
W. Randolph Kloeetzi

仏教の コスモロジー

瀧川郁久 (訳)
Ikuhisa Takigawa

BUDDHIST COSMOLOGY, From Single World System to Pure
Land: Science and Theology in the Images of Motion and Light
by W. Randolph Kloetzli

Copyright ©1983 MOTILAL BANARSIDASS

Japanese translation rights arranged with
Motilal Banarsidass Publishers Pvt. Ltd., Delhi, India
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

仏教のコスモロジー

2002年5月15日 第1刷発行

著 者	W・ランドルフ・クレツリ
訳 者	瀧川郁久
発 行 者	神田 明
発 行 所	株式会社 春秋社 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-18-6 電話 03-3255-9611 (営業) 03-3255-9614 (編集) 振替 00180-6-24861 http://www.shunjusha.co.jp/
装 幀 者	三輪佳織 (芦澤泰偉事務所)
印刷・製本	萩原印刷株式会社

© Ikuhisa Takigawa 2002 Printed in Japan

ISBN4-393-11210-5 定価はカバー等に表示してあります

はしがき

私が仏教の宇宙論コスモロジーに興味をもったのは、はじめてあの有名な『法華經』はけきょうを読んだときのことである。宇宙的なブツダの説法とともにこの經典に説かれている、大胆なイメージと確かな言説、それに幻想的な筋書き——それは驚くべきもので、私の理解の域をこえていた。そこで、どこかに説明はないかと探し求めたが、見つからなかった。

このような宇宙論は經典で中心的な位置を占めているので、将来の研究に値する問題であると思われたし、また調べればすぐに見当がつくであろうという気がした。しかし、これが研究に値する問題であるという見込みは当たっていたが、すぐに見当がつくであろうという見込みははズれていた——残念ながら。

その後、何年もかけて謎解きに挑んできた結果、次の三つの事実に気がついた。

(一) 仏教の宇宙論には、二つの別々の系統がある。一つは時間と運動を基本的な宇宙論上の隠喩いんゆとして強調する系統、もう一つは空間と光明を強調する系統である。

(二) 仏教のさまざまな宇宙論は密接に関連しあっており、その一つだけを取り出して理解する

ことは不可能である。

(三) 仏教の宇宙論はそれだけが単独で存在しているわけではなく、広く古代世界全体の想像力をとらえていた科学と神学の理論、特に古代の数学と天文学の知識と密接に関連している。

このようにいくつかの視点から仏教の宇宙論という問題を検討した結果、一つの一貫した説得力のある図式が見えてきた。

本書では、仏教の宇宙論を四つの主要な要素に分けて提示する。すなわち、「須弥山^{しゆみせん}世界の宇宙論」「千の宇宙論」「無数の宇宙論」「浄土教の宇宙論」である。このうち「千の宇宙論」と「無数の宇宙論」は、私が「数学的宇宙論」と呼ぶものの主要な二系統である。

本書では、二つの理由からこの数学的宇宙論を中心に据えようと思う。第一の理由は、数学的宇宙論が他のさまざまな宇宙論の背後にある意図を読み解くための鍵となるということ、そして第二の理由は、仏教における宇宙論的な思索のもとになっている科学的な基礎が、数学的宇宙論にもっとも際立って現れているということである。

本書の内容は次のように分かれている。第1章では、仏教思想史における四つの主要な宇宙論とそれに対する現代の研究者の理解を示した上で、その主要な問題点を指摘する。

第2章では、単一世界説の概要を示し、あわせてこの宇宙観の意図についての一般的な見解を紹介する。本書の一番の関心はこの単一世界説にあるわけではないのだが、いくらか詳しく説明

しておく。これは、参照の便宜をはかり、宇宙論にかかわる他の仏教説との関連を示すためである。

第3章と第4章では、「千の宇宙論」の概要を示した上で、この宇宙論の主要な概念の解釈の試みを開始し、この宇宙論の中心に位置する救済のドラマの要点を分析する。

第5章と第6章では、「無数の宇宙論」の構造を示し、救済のドラマの根本的な変質を検討する。以上の考察が本書の核となるもので、ここではそれぞれの宇宙論の科学的な基礎を見極めながら、部派仏教の宇宙論と大乘仏教の宇宙論の相違を明らかにする。

第7章では、二つの数学的宇宙論に含まれるドラマの決定的な違いを要約し、さらに本書で十分に論じられなかったいくつかの提案を付け加えて、仏教の宇宙論を研究する場合にわれわれが直面する最も基本的な問題を明らかにしたい。

さらに付録として、本書で取り扱った資料を要約し、あわせて将来の研究の参考となる文献を紹介しておいた。

本書を刊行したことで、激励を与えまた知性を研ぎ澄ましてくれた人々に公に謝意を表する機会をもつことができた。私が彼らに負うところは極めて大きい。

まず私が宗教に関心をもつきつかけとなった家庭環境を与えてくれた父母に本書を捧げる。

ウィッテンバーグ大学では、西欧の宗教に対する健全な神学的・哲学的再検討に触れ、比較宗

教学へと導かれた。私は今でもこの大学時代の先生方、とりわけミルトン・クライントップ、マーガレット・アーマース両先生への感謝の気持ちを忘れることはできない。

一九六四年には、宗敎史の勉強のためにシカゴ大学に入学した。この大学では、ジョセフ・ハロウトウニアン、ジョセフ・シトラ、フランク・レイノルド、J・A・B・ファン・ブイテネンの諸先生にお世話になった。それから、特別の学恩をこうむった研究者として、二十世紀の二大巨頭、パウル・テイリツヒとミルチア・エリアーデの名を逸することはできない。

卒業後、私は公職に就いたが、これは思ったよりずっとやりがいのある仕事であつた。ささやかながら社会に貢献することができた上に、十年以上にわたつて生活の資を得ることができたのは、アメリカ労働省のおかげである。この間にも学問的な興味が失われることがなかつたのは、アルフ・ヒルバイテルの励ましによるところが大きい。

友人としてまた教師として、彼からこうむつた恩恵は計り知れない。彼の絶えざる励ましがなかつたら、本書は完成しなかつたであらう。彼の広い関心、インド資料を扱う場合にとても重要な細部をとらえる才能、それに熱心な資料の蒐集、これらによつて道が開けたのである。彼の協力がなかつたら、本書は今よりもずっとミスが多いものになつていたであらう。

最後に、この研究に携わつている間、なにかと迷惑をかけることが多かつたにもかかわらず、いつも変わらぬ友情を示してくれた、すべての人々に感謝の意を表したい。

なかでも、この研究についてのとりとめのない長話に耳をかたむけ、また不審の念を抱きながらも手がかりを得ればともに喜ぶという心遣いを示してくれた、キャサリン・ロマーノには、とりわけ深い感謝の意を表したいと思う。

W・ランドルフ・クレツリ

仏教のコスモロジー



目次

はしがき 1

第1章 仏教の思想と宇宙論…………… 3

宇宙についての不可知論 3／宇宙論と古代の科学 22

第2章 須弥山世界の宇宙論——単一の世界…………… 34

基本的なイメージ 44／天体とブラフマーの教え 57

第3章 「千の宇宙論」——「から多へ、多から一へ」…………… 66

時間と数えきれない世界 66／増殖するブツダ 83

第4章 「千の宇宙論」のドラマと「道」…………… 94

宇宙的な時間の間隙 94／解脱への道とブラフマーの輪 98

第5章 「無数の宇宙論」と光の教え…………… 114

基本となる神話素 117／十方の諸仏 124／光線の放射 131

第6章 「無数の宇宙論」の終末論——カンガー河の砂の数ほどのブッダたち…………… 142

無限大と無限小 142／カンガー河の砂 150／知の作為としての宇宙 153／ブッダの瞑想
157／再生の種子 162

第7章 結論——運動と光明…………… 168

付録 参考文献…………… 189

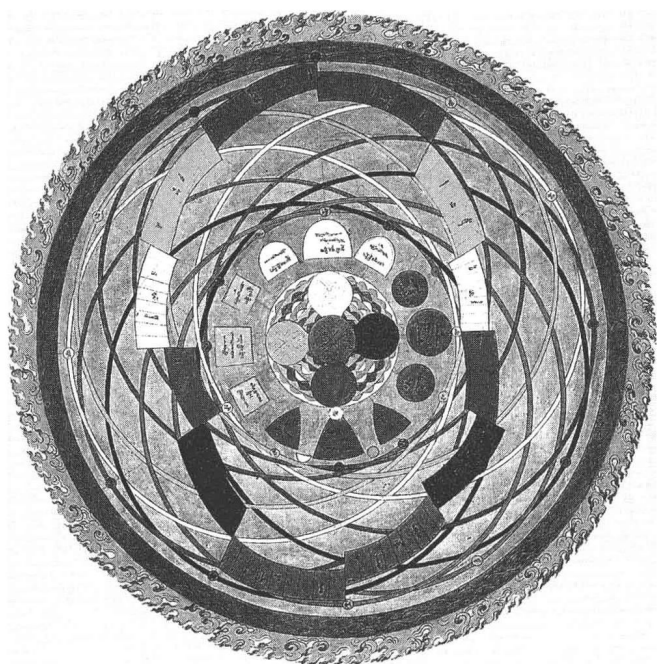
原註＋補註 223

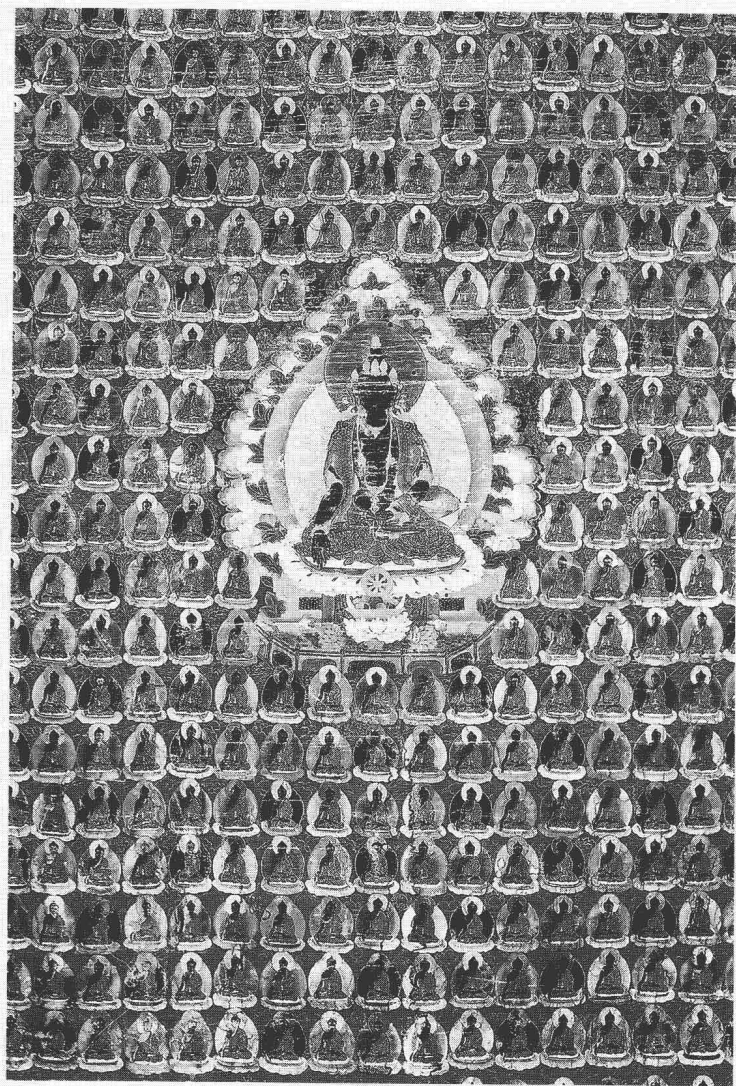
用語解説 259

訳者あとがき 263

索引 2

仏教のコスモロジー





第1章 仏教の思想と宇宙論

宇宙についての不可知論——仏教のパラドクス

世界には始まりと終わりがあるのか、世界は空間的に有限か無限か、その他、身体と宇宙に関するさまざまな疑問についての思索を拒絶することとは、ブッダの教説の中心であつた。これは一般に広く認められている仏教説の一面である。

いわゆる十四無記¹は、このような考え方を手際よくまとめて表現したものである。

世界と自己は（一）恒常か、（二）無常か、（三）恒常かつ無常か、（四）恒常でもなく無常でもないか。世界と自己は（五）有限か、（六）無限か、（七）有限かつ無限か、（八）有限でもなく無限でもないか。如来（^{にやらい}涅槃に到達した人）は死後にも（九）存在するか、（一〇）存在しないか、（一一）存在しかつ存在しないか、（一二）存在もせず存在しないのでもないか。生命の原理は身体と（一三）同一か、（一四）別異か。

ブッダは、これらの問いは空疎であつて、解脱のために重要なものではないとして、回答を拒否した。そのため、ここに挙げられた選択肢は、仏教ではいずれも誤謬または異教説であるとされて却下された。

ところで、このうち「宇宙が有限か無限か」という問いについて、どちらの立場をとつたとしても、明らかに学説に無理が生じてしまうが、このことから、これらの「宇宙論的」な問いの意味するところが、さらに明らかになる。

すなわち、もし宇宙の数が有限であるならば、無数のブッダが各自で無量・無数の衆生を救済するとされているのであるから、いずれはすべての衆生がいなくなってしまうということになる。常に新しい衆生がいなければ、その数は尽きてしまうであろう。

一方、もし宇宙の数が無限であるならば、ブッダが一切智者であるということとはありえないであろう。⁽²⁾『ディーガ・ニカーヤ』に含まれる「ブラフマジャーラ・スッタ(梵網経)」は、「宇宙は(一)有限であるか、(二)無限であるか、(三)横に無限であり上下には有限であるか、(四)有限でも無限でもないか」という広範囲の理論を批判しているが、これは上のような意見を反映しているのである。⁽³⁾こうして、ブッダの教説の顕著な特徴は、「宇宙論的」な問いに対する整然とした不可知論として性格づけられるようになった。

このように、仏教教団では、宇宙論の問題に関する思索に対して、さまざまな形で反感が示され

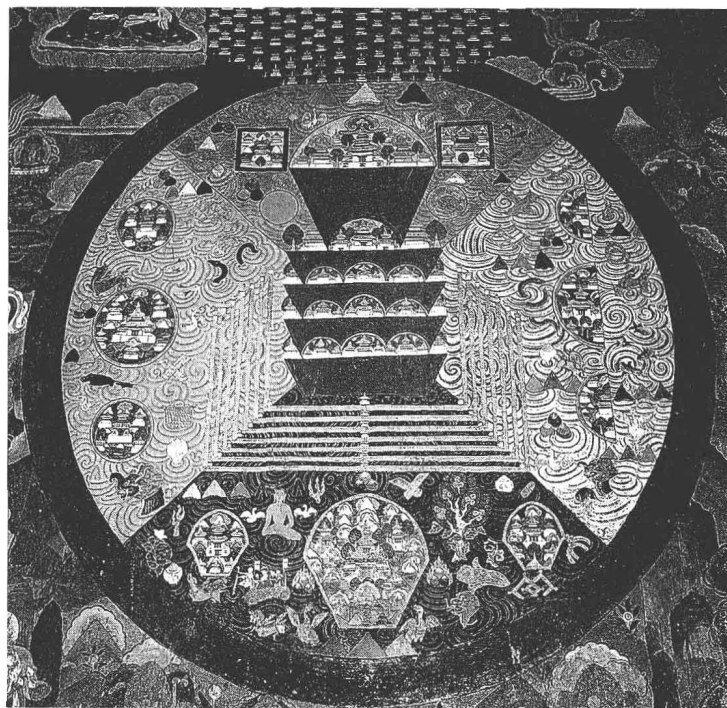


図1 チャクラヴァーラ山脈（鉄圍山）に囲まれた須弥山世界（ブータン）

ている。ところが実際には、仏教において宇宙論は非常に大きな地位を占めているのである。

最初期の仏教文献⁴は、単一の円形の世界という視点から宇宙を描写している。この円形の世界はチャクラヴァーラ（あるいは、チャクラヴァーダ、パリー語ではチャツカヴァーラ）と呼ばれるが、この名称は、円形の世界の周囲を取り囲むチャクラヴァーラ山脈（鉄圍山）に由来する。

その円形の表面上に、一般的に「四禪」と呼ばれる四つの禪定の領域が続く。この禪定の領域は段階的に十七の天界に区分される

が、これは阿羅漢（アルハット）と呼ばれる仏教の聖者の境地をめざして宗教的な修行にいそむ声聞の修行の進展を示している。禪定の修行を通じて、すべての禪定の領域から離脱すれば、完全な滅尽である涅槃（ニルヴァーナ）に到達する。

これらの資料の記述は利用しやすく、また説明が明瞭で首尾一貫していることから、研究者の多くは、仏教の宇宙論を論じる場合、議論をこの単一世界のみに限定し、またこの世界の体系を最も重要視してきた。仏教の宇宙論のその他の側面はほとんど顧みられなかったのである。

その理由は明らかで、仏教のサンスクリット文献の中で多様化したものと奇妙な宇宙論の数々と同様、実際にはなんら意味をなさないとしても、これらの単一世界の記述は、少なくとも、整然としており、簡略に図示できたからである。

このような「須弥山世界の宇宙論」についての議論は、ほとんど例外なく、まったく説明を欠いており、名称と数値の単なる羅列にすぎないものになっている。（訳註 混乱を避けるため、訳文では山名を「チャクラヴァーラ」と表記し、チャクラヴァーラ山脈に囲まれた「チャクラヴァーラ世界」は伝統的な用語を借りて「須弥山世界」と呼ぶことにする。）

須弥山世界を描写する二次的文献は、仏教の浸透しているあらゆる文化圏に大量に存在するが、本書では、『アビダルマ・コーシャ』（以下漢訳名で『俱舍論』と呼ぶ）の記述に従って、須弥山世界を考察した。『俱舍論』を選んだ理由は、その説明が細かい点まで詳しく、しかもプサンによる